

## マタイによる福音書第9章9-13節に関する黙想

### 1. ハンス・ヨアヒム・イーヴァント

5 (Hans-Joachim Iwand, Predigtmeditationen, 2. Auf. 1964, 32-35, 1946)

なぜ、ルターは、この福音書の記事がそれほど理解困難であると思ったのであろうか。ルターの言うところによると、この福音書の言葉を聴いたすべての者が錯覚して、直ちに思い込むことは、自分がどこに属しているかということについてである。つまり、自分は病める者であり、罪人であり、徴税人であると思い込むのである。なぜかと言えば、キリストが、そこおられるのを知っているからである。「キリストがおられるところ、それがどこであっても、そこにわれわれはいたいと思っている」(ルター)。しかし、この福音書の言葉は、まさにわれわれがいたいと思っているところで、われわれに呼びかけているのではない。そうではなくて、現にわれわれがいるところにおいて、われわれに呼びかけるのである。そして、この世的に見るならば、おそらくたいいの場合に、事情は全く異なるのである。この世的に見るならば、おそらく、われわれは、キリストを「罪人そして徴税人」の傍らにではなく、「正しい者たち」の傍らにおられることを期待しているのである。この世的に見るならば、おそらく何度でも、本来の躓きとなることは、キリストは、われわれが、キリストを得たいと思っているところに来られることを、ご自身の使命としてはおられないということである。キリストはご自身の道を持っておられる。ご自身に与えられた使命を持っておられる。それ故に、われわれは、われわれがキリストを期待しているつもりの場所を捨てなければならないのである。そして、キリストの到来を求めてもいなければ、期待もしていない人びとと同じ人間にならなければならないのである。「キリストは、ご自身がおられないところには、来られないのである」(ルター)

このすばらしい福音について、更に何かを語り得るとすれば、ここから出発しなければならない。この福音書の言葉について説教をする者がしなければならないことは、主イエスのこのような行為、このような道を、目に見えるように、しかも心動かすように描き出すということである。そうすれば、われわれはキリストにお会いすることができるようになる。そのキリストは、この世の裂け目に入り込み、そこで審きをし、この世を咎めようとなさるのである。そして、ご自身の、神としての、しかも憐みに満ちた審きをくだされる。それによって、一挙にすべてのものが逆転する。それによって、最後のものが最初のものになる。最初のものが、最後のものになる。これによって、正しい者はその義を抱えたままに、神なき者として立ち尽くすことになる。まさしく自分自身のただなかに神ではなくて、自分自身の義を立てている人びとである。これによって罪人は義人となる。単純に言って、それはキリストが、罪人たちの間に王座をお定めになるからである。罪人の兄弟と呼ばれることを、恥となさることはないからである。これらの物語は、まるで絵画のようである。その大きな主題は神の義であって、それが目に見えるように描かれているのである。そこでは、われわれは人びとに、子どもたちに挿絵がいっぱいのお手本を示しながら語って聴かせるように、この神の論理の本来の秘密を、目に見えるように語ってあげることができるのである。これは、神の義である。われわれが得なければならない義である。われわれが祝福を得たいと思うならば、この義を求め、そして他のいかなる義も得ようと思わないならば、これを得なければならないのである。そして、これこそ、十字架である。十字架はこの世に対し

て躓きとして据えられている。なぜかと言えば、十字架が意味するところは、キリストが、罪人そして神なき者のひとりと数えられたからである。このことに激高して怒り狂ったファリサイ人びとの頭脳と心に人殺しの計画が熟していく。そして、これこそ盛大なる喜びの食卓であり、すべての者がこれに招かれている。主の晩餐である。そこで主はご自身を献げ物としてくださる。

- 5 なぜかと言えば、主が罪人の中におられること、主のご臨在(*praesentia*)はまさしく罪びとの赦し (*remissio peccatorum*) を意味するからである。これが神の新しい世界であり、新しいいのちなのである。

## 9 節

- 10 マタイ——マルコヤルカではレビと呼ばれている。既に、クリュストストモスが、この名が挙げられているところに、ひとつの信仰の告白を読み取っている。「マタイ自身が自分自身の名を挙げて呼んでいるが、それは、より良きものに向きを変えさえすれば、救いに絶望することはないということ、集まる者たちに示しているのである」。現代の解釈者たちが、考えることも、ここに論じられているマタイは、われわれのこの福音に特別な関係を持っているだろうということである。
- 15 絵描きが、あまり目立たないところに、自分自身を描き込んでいる絵を考へてみる事ができるであろう。そのように、マタイはこの福音書の中に立っている。「救いが行われた罪人」として立っている。徴税人たちが、主の呼びかけに、自分自身の側には動機がなくても、突然、従ってしまっていることについて、既に異教徒の批判者たちが嘲りの言葉を語った (ポルフィリウスや、背教者ユリアノスなどである)。しかし、真実を言えば、そこで語られていることが、ただこの転身の全重量は、主の呼びかけの中にあるということに他ならない。「主がお呼びになった者たちを、主はまた選んでおられるのである」。われわれの召命(*vocatio*)は、〈何かの経験〉に依存するものでない。そうではなくて、われわれの経験は、ヴォカチオに答える応答である。しかも行為をもって従順にお従いするという答えなのである。ひとつの〈甦りのわざ〉が、ひとつの行為であるのと同じように、主に従うということは、すべての所有を捨てるということである (ルカ
- 25 による福音書第 5 章 11 節、マタイによる福音書第 19 章 27 節。マタイによる福音書第 8 章 22 節と第 19 章 21 節をも参照のこと)。

## 10 節

- 「食卓の交わりを整えることを通じて、イエスは、赦しを与える者として行動しておられる」(シュラッター)。おそらく、シュラッターが語っているよりも、もっとなお多くのことを語らなければならぬであろう。イエスは、ファリサイ派の教育が作り上げて来てしまった裂け目を塞いでおしまいになったのである。「ファリサイ派は、人間同士の交わりの中でも律法を順守しようとする。そのために、イエスに対して抵抗せざるを得ないと感じ取っている。なぜかと言えば、罪人から義人を分けるということが消えてしまうことによって、すべての慣習、すべての信仰が粉々にされてしまっているとみているからである。それどころか本質的に言って、どの村にあっても誰についてもその人が〈罪人〉であるか、あるいは〈正しいひと〉であるか、ということをよく知っているということこそ、ファリサイ派のしていることであつたのである」(シュラッター)。ファリサイ派の考へていることは、ただ単に内的な自意識の問題などというのではない。つまり〈傲慢〉とか〈偽善〉というようなものではないのである。そうではなくて、ひとつの〈秩序〉の問題であつたのである。それが共同生活を形作っており、ファリサイ派の人たちの〈義〉が、いわば教会秩序の中に表現されていたのである。罪人や徴税人たちと交わる事、第六と第七の戒め〔第七と第八の戒め〕に背いている者 (ベンゲル) と食卓の交わりとをすることを、共同

体を壊すことであると考えられていた。「そこに生じていたのは、アム・ハー・アーレツ〈地の民〉、つまり律法を知ることもなく守ってもいない〈無知の人びと〉に向かい合い、ファリサイ派の聖人たちが対立することであった。この対立は、極端にその限界にまで行っていた。祭儀における器をさえ区別するようになったのである。ファリサイ派の仲間たちが、義務としなければならな

5 かったことは、異教徒、あるいはアム・ハー・アーレツの輩とは食卓を共にしないということであった。こういう険しさの中に、一種の新しさが生まれていたのである」(マックス・ヴェーバー)。

イエスが、ご自身の行為をもって打ち壊してしまっておられるのは、いあわば特定の教会の聖さの理想とも言うべきものであって、ファリサイ派の人びとたちが苦心惨憺してここに限界を定めていたものである。もちろん、更に明らかにならなければならないことは、イエスだけがこの

10 〈垣根〉を取り去ることがおできになるということである。それどころか、これを取り去るということこそ、イエスが遣わされて来られたことの意味であったのである。「それ故に、私どもの愛する主キリストが徴税人たちと罪人たちの間に、そのよい仲間として存在しておられるということは、すてきな、慰めに満ちた光景であります。主キリストは、ファリサイ派の人びとがそうしているのと同じように、すべての律法をよしとしておられます。なぜかと言えば、キリストは律

15 法の主であられるからであり、律法と共に歩まれたからです。しかし、まさにそれ故に、キリストは、私どもを、律法から解放し、律法を必要としなくなる者とするように地上に来て下さったのであります」(ルター、ヴァイマル版全集第52巻、707ページ)。

11 節 ヘブライ人への手紙第4章15節を参照。

まさしくここに見られるのは神の大祭司としてのみわざであり、シュニーヴィントは、イエスが罪人に対する愛について語られている、多様な物語や譬え話に関連して、こういうふう

20 にいる。「(ユーリヒャーが言うように) 悔い改める罪人を励まそうとして、イエスがこれらの物語をなさったというのが、第一のことではない。むしろ、これらの物語はファリサイ派の人のために語られているのである。ファリサイ派は、イエスの罪人に対する愛の故に、躓いているのである。ファリサイ派の人びとは、この譬え話によって何が語られているかを理解するであろうか。

25 われわれは、イエスの言葉がわれわれに向けられていることを理解するだろうか。譬え話は、正しい人に向けられている。正しい人びとは断固として神の道を歩いているのである。これらの譬え話は、真剣に信心深くあろうとする人びとに向けられている。これらの人びとこそ、イエスの罪人への愛に躓いているのである。これがわれわれの状況ではないであろうか(シュニーヴィント『失われた息子の譬え話』)。

30

12 節

イエスは、ご自身のすべての行動を病人を癒す医師のイメージで語っておられる。「なぜかと言え

35 ば、イエスはこう言おうとしておられるのである。罪人である者は、その魂において、いかなる疾病にもまさって、もっと危険な、深く傷つく病を得ているのである……そして、そのような病をもたらし

40 ているものが、体の病ともなり得るのである」。神が、人間の罪を病として認識し、これを癒すために来てくださっているということこそ、神の恵みであり、憐れみである。キリストは、罪によって崩され、荒野になってしまっている世界のなかであって、この病のただなかに、お立ちにならなければならないので

40 した。そこでイエスの福音は、〈苦しんでいる〉すべての人のための喜びのメッセージとして語られなければならないので

40 した。そこでこそ、キリスト、われわれの救い主が来てくださっているということが、明らかになるためである。

## 13 節

この物語が最も語りたことは、罪人ではなく「正しい人たち」に向けられている。ホセア書の引用（第 12 章 7 節「神のもとに立ち帰れ。愛と正義を保ち／常にあなたの神を待ち望め」という言葉を参照）が明らかにしているのは、そのことである。ルターが見ていたのは、このホセア書の言葉が、律法において命じられている「最高の神礼拝」に対する批判として語られているものであったということである。献げ物と自分自身を献げるという考えが、ここでは憐れみと厳格に対立するものとして登場してきている。それは、断食と同じである。この世の人びとに感銘を与えるような禁欲ではなくて、罪人を助ける憐れみこそ、神のご意志なのである。イエスの弟子たちの歩む道は、それ故に、ファリサイ派の人びとの道とは異なるものとなる。憐れみの行為においてこそ、同時にそこに、神の愛の勝利に対する信仰が成り立っているのである。

注目すべきことは、なぜシュラッターが、「正しい人たち」という概念について、この最後の引用においては、アイロニカルに理解してはならないと戦ったのかということである。「医師を必要とする病人たちは、見せかけで病んでいるのではない。また丈夫な者も、見せかけで丈夫な者であるというのではない。〈見せかけ〉の義と言うのならば、当然そこで至らざるを得なくなるのは、罪に対するイエスの戦いを和らげてしまうということであり、イエスの赦しを、友情をもって勘弁してやるということにすぎないと変えられてしまうことである。そのようなことは義というものを真剣に取り扱うことを拒否してしまうことになる」（309 ページ）。そのように考えてこそ、正しい者が「イエスが赦しを与えることを拒否してしまい、罪に落ちてしまっている者を裁いてしまい、神の恵みと争うことになってしまい、自分自身の義から落ちてしまうのである」。シュニーヴィントも、似たようなことを言っている。しかも、ここで問わなければならないことは、ここで語られている「正しい人たち」は、最高の神礼拝、つまり〈いけにえ〉を献げ尽くしているのではないか、ということである。〈犠牲という考え方〉との正しさが語られているのではないか。しかも、それによって、より高い義、よりよい義を求めて、退けられてしまっているのではないか。なぜかと言うと、キリスト抜き義は、失格せざるを得ないからである。そのようにしてこそ、もうひとつの義が、われわれの義となる。それこそ、神の慈しみから流れ出る義、しかも、われわれを憐れみへと駆り立てる義なのである。

## 30 II. ヴォルフガング・シュラーゲ

(Wolfgang Schlage, GPM, 1968/69, S. 248-256)

マルコによる福音書第 2 章 13 節がしてみせているような要約をするわけでもなく、マタイは、中風の男の癒しの物語にすぐ続いて（9 節）、マタイの召命と（10-13 節）「徴税人の食卓」を続けて記述している。いずれの文章もかつてはそれぞれ独立に伝えられていたものであろうが、既にマルコにおいてともに結び付けられている。それは、おそらく両者とも徴税人に関わりがあるからであろう<sup>①</sup>。

## 38

<sup>①</sup> しかし、主要な言葉が結びつくだけでなく、事柄が示す諸契機もまた、結合を促したとも考えられる。たとえば、シュヴァイツァーのマルコによる福音書注解を参照されたい（NTD 第 1 巻、1967 年、35 ページ）。マタイは、ふたつの場面とも、神の憐れみの表現として理解したのかとも考えられる。その際、第 2

9 節は、マタイが、主イエスに従うように召し出されたことについて、きわめて簡潔な物語の形で報告している。マルコにおいてアルファイの子レビの名で呼ばれていた男は、明らかにマルコ以前の伝承においてすでに確定されていたと思われる。なぜかと言うと、この名がマルコによる福音書第 3 章 13 節以下の使徒のカatalogueの中には欠けているからである。そうでなかったならば、ここで 12 弟子のひとりとして名を挙げられていたであろう。ということは、マタイによる福音書第 9 章 9 節以外にも、マルコによる福音書が第 2 章 14 節においては〔アルファイの子として〕ヤコブという名が挙げられていることにおいても証明されることである（マルコによる福音書第 3 章 18 節参照）。もちろん後にマルコにおいて名をレビと呼ばれていた弟子が、後代における使徒としての呼び名としてマタイと呼ばれるようになったかもしれないが、それをここに既に掲げていることは調和の欠けていることである。マタイによる福音書第 9 章の 9 節が、マルコによる福音書第 2 章 14 節に依存するものであり、口伝による伝承のもうひとつの流れを伝えているのではないかという推測は（ローマイヤー当該箇所）、確かなこととは言えない。むしろ明らかなのは、後の時代の人びとにとって無名であるレビが、よく知られている 12 弟子のひとりの名前によって置き換えられたであろうということの方が正しいように思われる。（だからと言ってこのことは、第一福音書の著者が誰であるかという問題について何か意味のあることを語っているわけではない。またこのことをさらに強調して、きわめて短く、謙遜に満ちたためらいを含ませて、あまりよくない自分の過去について、ここで福音書記者が自分の悔い改めについて語っているのだというようなことを、説教に文章を加えて語るようなことしなくてよいであろう）。初代の教会において優れた人物であったひとを、このような形で福音書の中で紹介しようとする努力は、もちろんわれわれにとってお手本になるようなものでもない——おそらくまた、これが名前が変えられた唯一の動機であったということでもないであろう（以下の叙述を参照のこと）——名前をいろいろ入れ替えることができたということは、徹底的に肯定的に受け入れられるものであって、説教においてこれに言及するということは実り多きものとなるであろう。しかもこれは、特定の名前に結びつける必要もない召し出しの物語の典型化したものというよりも、むしろひとつの見本を語った物語としての意味を持つものなのである<sup>②</sup>。このことは様式史研究が洞察するところによれば、アポフフェグマタというのは「目に見えるような場面を描いて状況を越え出るような真理を語ろうとするものである」というのであるが、そのような洞察に対応するものである。「それ故、これは象徴的な意味を持つのである」<sup>③</sup>。これはひとりの目撃者が召し出されたということを史実として語っているのだということを言い張ることは、従って、容易に致命的な結末を招くことになる。つまり、イエスが声をかけられるということは、まったく自由な恵みによるものであり、名の無きも者、名の知られない者にもあてはまることなのだとすることを覆い隠してしまうのである。

名前の問題よりもより重要なこととしてふたつの論点がある。第一の論点は、この場面に限つ

33

の場面は、同時に、弟子たちによって憐れみが実現されることを意図しているのである（黙想の更なる叙述を参照されたい）。

<sup>②</sup> 「名前を入れ替えることによって見えてくるのは、福音書記者が、この逸話が典型としての意味を持つ感じていたということである」（A. シュラッター『福音書記者マタイ』A. Schlatter, der Evangelist Matthäus)第 5 版、1959 年、303 ページ）。名前の変更は、つまり「説教にとって、どうでもいいもの」ではないのである。レスラー(Röbber)が言う通りである（ゲッティンゲン説教黙想集第 17 巻、1962/63 年、239 ページ）。

<sup>③</sup> R. ブルトマン『共観福音書伝承の歴史』（旧約聖書・新約聖書宗教・文献研究叢書第 29 巻）(R. Bultmann, Geschichte der synopt. Tradirionen, ERLANT 29) 3 版、1957 年、59 ページ、マルコによる福音書第 2 章 14 節については、26 ページ以下を参照。





はなくて、マタイがイエスの呼びかけが起こった場所がどこであるかということをも明らかにしているのである。この場所は、たいへん特色のあることに、荒野ではない。洗礼者ヨハネの場合のように、その荒野に出て行かなければならないというものではなかった。またそれは、神殿とかシナゴクとかいうようなものではない。そうではなくて、イエスがふた組の兄弟に、その漁師としての仕事をしている時に会われたように、人間がこの世において働いている場所を具体的に示すのである。具体的な場所なのである。具体的に言えば徴税している、その場所であるか、ないしは徴税の役所であったのである。主の呼びかけのお言葉は、この世のただなかにおいて人間を捕える。世俗的な日常生活のなかで捉えるのである。それ故に気をつけなければいけないことは、主のこのような召し出しの言葉を、日曜日の礼拝にだけ閉じ込めてしまわないようにということである。そのようにして牧師の仕事にしてはならないのである。説教者が〈お召しの声を伝える〉唯一のものでもないのである。教会の壁の中という空間だけが、主の呼びかけの言葉が人を捕え得る唯一の場所ではないのである。何よりも気をつけなければならないことは、主に従うということ敬虔な人びとの閉ざされた群れに限定しないということである。当時既に主に従うということは、家族の絆を断ち切るという人びとにこそ向けられるものではあったけれども、それはこの世から逃げ出すことではなかった。修道院に入ったり、荒野の存在になってしまうことではなかった(クムラン参照)。どこかに移民のように出かけてしまうということではなかったのである。そうではなくて、この世の中に踏み出すように呼びかけられること、公の中へと赴くことであった。イエスと歩みを共にして、罪人や失われた者に向かう道に赴くことであったのである。

主に従うということが、この世から出て禁欲的に際立った営みをするというようなものではないのだということを証明しているのが、これに続く食事の場面である(10-13節)。どこでこの食事が行われたかということは、マルコの場合よりもマタイの方がよりはっきりしているということではない<sup>5)</sup>。しかしおそらく、このマタイにおいてはイエスご自身の家を考えることができるであろう。そこで人びとは当時の習慣に従いクッションに寄りかかって「食卓に横たわっている」のである<sup>6)</sup>。イエスの態度を正しく評価することができるために、当時「徴税人と罪人」についてのどのような評価が一般的になされていたかを少し思い出しておくことがよいであろう。また食卓の交わりというのが何であったかということをも思い出しておくことよいのである。徴税の仕事を引き受けたり、請け負ったりするということは、敬虔な信仰に生きたユダヤ人社会においては軽蔑され、憎まれることであった。それはただ彼らが貪欲で乱暴な税の取立てをしてローマの占領権力の役に立っていたというだけではなくて、彼らが律法をも尊重していないということのためでもあった。ユダヤ教の文献を見ると、これらの人びとは場合によっては売春婦や盗賊たちと同じレベルの者だとされていたのである(ルカによる福音書第18章11節参照、あるいは罪人・異邦人・売春婦と並べられていることを参照されたい)。この職業が軽蔑されるものであったというのは、もちろんただユダヤ人だけに限られたことではない。たとえばルキアノスは徴税人を売春宿の主人や、権力にへつらって生きている者や、密告を商売とするような者と、一息で同一視されているのである<sup>7)</sup>。罪人(ἀμαρτωλούς)というのは、たとえばローマの信徒への手紙第5章

### 36

<sup>5)</sup> マルコにおいては、そこで示されるかんれんからすれば、レビの家と考えられる(ルカによる福音書第5章29節においては、その点ははっきりしている)。そこで得られる結論は、マルコにとっては、主イエスに従うということは、それ自体が直ちに、財産を失うということではなかったということである。

<sup>6)</sup> 『新約聖書神学事典』第3巻、655ページのビュックセル(Büchsel)の叙述、ビラーベック(Billerbeck)の注解書第4巻、56ページ以下を参照されたい。

<sup>7)</sup> これ以上のことは、『新約聖書神学事典』第8巻、98ページ以下のミヒェル(Michel)の叙述、ビラー

8 節や 19 節におけるような神のみ顔の前における(*coram Deo*)罪人ではない。そうではなくて不道徳な生き方をし、よからぬ評判を立てられていた人びとのことであり、またファリサイ派が理想としていた律法に生きることをしていない人びとでもあったのである。あるいはイ派の人びとのような律法の解釈をわきまえていなかったのである<sup>8)</sup>。要するに徴税人や罪人というのは、不道徳で律法を知らない者たちの恐るべき実例なのであって、呪われ(ヨハネによる福音書第 7 章 49 節参照)、軽蔑されるのは当然のことである。

つまりこういうことである。徴税人が自分の働いている徴税所の前を通り過ぎる人びとについてよくわきまえていたかもしれない。「これらの人たちはすべて私は地獄落ちだと決めつけている」<sup>9)</sup>。それに対してイエスは、「神への道は開かれている」と招かれるのである。イエスは、徴税人を侮蔑したり、罪人として、決めつけてはおられない。そうではなくて、その傍らにお立ちになる。「罪人と徴税人の仲間」となれるのである(マタイによる福音書第 11 章 19 節)。そして、ご自分の仲間たちに対してもこのような交わりを作れとお勧めになる。道徳的に悪い人間だと見なされ、敵に属する者だと、敵に通じる者だと思われているような人さえもイエスはご自分の近くに呼び寄せられ、それと和解することもできないほどに対立している人とひとつの交わりを作らせておられる(マタイによる福音書第 10 章 3 節およびルカによる福音書第 6 章 15 節において徴税人と熱心党とが並べて語られていることを参照せよ)。

当時の人びとの考えにとってそれよりももっと衝撃的であったのは、おそらくイエスが、これらの宗教的に社会的に差別されている人びとと共に食卓に着かれたことである。厳格に律法を守ろうとするユダヤ人たちにとって考えられない態度であり、躓きになる事実であった。律法を守るユダヤ人たちにとって当然のことであったのは、ただ正しい人間とのみ食卓を共にするということであった(既にシラの知恵第 9 章 16 節はそう語っている)。また「あなたは民衆たちから自分を区別し、決して彼らと共に食事をしてはならない」と語る言葉もある。ファリサイ派にとって律法を知らない人びとと共に食卓に着くことは恥であった<sup>10)</sup>。エッセネ派の人びとのように人びとから離れて僧院にこもるような生活をする人でなくても、共同の食事について厳密な修道会の秩序に従わなければならない人でなくても(そのような食事をするのは僧院に入って二年経ってから初めて可能だとしている規則がある)、徴税人のようないかがわしい人びとと交わることは避けられたのである。信仰深いユダヤ人たちはいかなる身分の者ともいえども、そのように徴税人たちと食卓に着くことは慣習に反し信仰に反するものと見ていたのである。

このようなことを背景にして考えてみると、イエスの語られるメッセージと態度とは、このような人びとにとって挑発的であり、むしろスキャンダルに属するたぐいのものであった。イエスは、しかし、圧倒的な自由をもってファリサイ派の聖さを守る掟や、ユダヤ人の律法理解を遙かに超えて、彼らにとっては侮蔑すべき者、退けるべき者とひとつの食卓に着かれたのである。この食卓の場面そのものは〈理念的〉であるかもしれない。その詳細については史実通りではなかったかもしれない。しかし、そうだからと言って疑うことができないのは、ここでは歴史的な思い出に手が加えられて語られているであろうということである。この場面は、理念も典型的と言った方がよいかもしれない。いくつかの主イエスの語録のなかに、このような食卓の交わりが前

### 36

ベックの注解書第 1 巻、378 ページ以下の叙述を参照されたい。

<sup>8)</sup> 『新約聖書神学事典』第 1 巻、331 ページのレングストルフ(Rengstorff)の叙述を参照されたい。

<sup>9)</sup> アードルフ・シュラッター『新約聖書講解・マタイによる福音書』(A. Schlatter, Erläuterung zum NT)1922 年、92 ページ。

<sup>10)</sup> 更にまた、使徒言行録第 10 章 28 節、第 11 章 3 節、マルコによる福音書第 7 章 1 節以下、ピラーベック、注解書、第 1 巻、498 ページ以下、第 4 巻、374 ページ以下を参照のこと。



提されていた文章があるのである（マタイによる福音書第 11 章 19 節、ルカによる福音書第 15 章 2 節を参照）。以下に続く場面（14 節、マルコによる福音書第 2 章 18 節も同じ）とは異なり、イエスご自身の態度が批判されているのであり、弟子たちの態度が批判されているのではない。イエスは、イエスの復活の後のキリスト者たちの自由を導き出された方であり、その守護聖人とも言うべき方であった。この自由は、初代の教会の特定のグループの人びとの几帳面さ、また不安な心から、いずれにせよ退けられなければならないほどのものであった。しかし、イエスご自身はすでにその地上の生活をしておられた時に〈潔いもの〉と〈潔くないもの〉との間の境界線を突破しておられたのである（マルコによる福音書第 7 章 15 節参照）。そして、神の面前における (coram Deo) 食卓の仲間として徴税人や罪人と共におられたのである。「この方は罪人を受け入れ、罪人たちと共に食事についておられる」（ルカによる福音書第 15 章 2 節）。

もちろん、イエスご自身がおひとり自由であつたわけではない。そうではなくて人びとを自由になさるのである。弟子たちもまたイエスによって自由を獲得した。閉鎖社会に閉じこもって信仰の社会を作るようなところを突破して、罪人や徴税人たちと共に食卓の仲間となることのできる自由である。（ルカによる福音書第 5 章 30 節が ἐπιθίετε を複数形で語られていることをも参照してもらいたい）。

このような食卓の交わりは、ただ一緒に食事をするという以上のことである。慣習に対抗するプロテストであったり、あるいは連帯の行動であるということ以上のものなのである。食卓を共にしてくださるということは、深い友情と結びつきを表現するものであり、和解のしるしであった。それは終末論的なバシレイアの栄光を、ここでそのバシレイアに属している者たちと共に、イエスが祝っておられるという喜びの食卓なのである。神の面前における (coram Deo) 物乞いたちとの食事である<sup>①</sup>。

それ故に、十分に理由のあることであるが、ファリサイ派の人たちの抗議にもかかわらず、罪人たちが〈召し出される〉ことについても語られるのである。ファリサイ派の人びとは、ここでは典型的にイエスと対立する者となっており、どこにおいても、むしろ平和をかき乱す者として描かれている（ファリサイ派の人たちが宴席にどのように紛れ込んだか、そこでどのようにイエスに〈お会いした〉か、ということはここで問う必要はない）。13 節後半が、おそらくイエスご自身が 12 節においてすでに語られていたご自身が何のために遣わされて来たかということ語る言葉を解釈してみせておられるのである。ἦλθον（来る）という言葉は、イエスの地上における働きを要約して振り返っているものであり、それ故に、この種類の他の言葉と同じようにほとんど史実そのものを語っているのではないとしても<sup>②</sup>、否定することができないのは、まさしくこの言葉こそ〈イエスの事柄〉を受け入れ、史的イエスに〈手がかり〉を得ているものであるということである。

12 節と 13 節が、囚われることなく丈夫な者、正しい者のことを語っていることは明らかである。ここで（原罪など）教義学的な伝承が入り込んでいると考える必要はない。そんなふうに見えるならば、これらの言葉の力を弱め、アイロニカルなものとして理解してしまうようなこととなる。またここで語られていないと思われるのは、丈夫な者とか正しい者というのは、ただ丈夫

① ギュンター・ボルンカム『ナザレのイエス』（ウルバーン叢書、第 19 巻）（G. Bornkamm, Jesus v. Nazareth, Urban-Bücher 19）1956 年、73 ページ以下、O. ホーフイウス『罪人と共にするイエスの食卓』（カルヴァー叢書、第 86 巻）（O. Hofius, Jesu Tischgemeinschaft mit den Sündern, Calwer Hefte 86）、1967 年、特に 11 ページを、参照されたい。食卓は、「人間を共に結びつけるのではなく、神の前で、神と結びつけるのである」。

② ボルンカム、前掲書、161 ページ以下、特に、164 ページ、166 ページ以下、176 ページ。

であるとか、正しいとか言っているだけのことだとしてしまうことである。つまり偽って自分は、そのような者だと考えており、真実のところは、やはり、どうしても医師を必要とするような者のことだと考えることである。もちろん、そのような人もいたかもしれないが、一般的にそう考える必要はないのである。ツアーンが言うように——「病人」が、ただ単に「靈的に丈夫な者」

5 からだけではなく、「靈的な死人」からも区別されるような者だというふうを考える者は、ここで描かれているイメージをただ異常なものにしてしまうだけではなく、むしろこのイメージの言葉のラディカルな力を失わせることになってしまう。逆に考えて、このメタファーが罪を罪でなくしてしまうような者として選ばれているわけでもない。そうではなくて、イエスはこのイメージを、罪人とは何かを示すためにこそ受け入れておられるのである。そのことによって、医者

10 を必要とする者の危うさと、だからこそ、どうしても助けが必要であるということを指し示しておられるのである。まさしく、イエスは罪を些細なことともせず、あるいは栄光化することもないが故に、罪人たちに身を向けられ、罪人たちに神の憐みを約束され、罪人たちと共に神の憐みを生きてくださったのである。病人が病を苦しむように、罪人が罪を苦しんでいたかどうか。罪人自身

15 が病んでいると思っていたかどうか。自分自身や人生に絶望していたかどうか。それらのことはここで語られてはいない。また同じように、罪人が自分の罪の中でかえってひどく快適に思っていたのではないとか、人間をその核心のところで捕え込んでいるはずの病の目に見える兆候を、ただ装っていたのではないかということも、問題にはならない。ここで問われているのは主観的な感情なのではない。客観的な病のイメージであるというのでもない。そうではなくて、神の面前における状況(status coram Deo)が語られているのである。そして、そのことによって包

20 括的な意味における救いと、救いなき状態が語られているのである。罪人 (ἀμαρτωλος) を神のところに導き救いにもたすのは、怒りや軽蔑ではない。愛なきままに罪人と決別し、信心深いグループ、信心深い閉鎖社会に閉じこもることではない。そうではなくて無条件に提供され、約束され、また実際に生きたものとなっている愛である。それは神の不可解なほどの愛そのものを反映するものである。

25 マタイは、12節と13節との間に、第12章7節と同じようにホセア書第6章6節からの引用を挿入している(「わたしが喜ぶのは／愛であっていけにえではなく／神を知ることであって／焼き尽くす献げ物ではない」)。そして、その導きとしているのは、ラビがよく用いる定形文章である。「行ってそれが何を意味するか学びなさい」。マタイは病める者がいかに困窮しているか、そして、まさに病める者に医師によって与えられる助けとは何であるか、ということ

30 を基礎づけるのに、ただ終末論的な意味でキリストが派遣されておられる(13節後半)ということだけではなく、更にまた旧約聖書を用いており、またそこで証言されている神のご意志を語るなのである。その際、きわめて明瞭になってくるのはここには二重の意味での志す方向が明らかになってきているのであり、それはわれわれのペリコーペのふたつの場面を共に結び合わせて括弧の中に括り込む助けとなっているのである。そのひとつは〈直接法〉が語っている意味である。つまりイエスが来られたのは、

35 イエスが罪人と徴税人をお呼びになっている(9節)ということである。ご自分の食卓に招かれたということも直接法である(10節)。それは神ご自身が恵み深く憐れみ深い方であるからである。そして、しかもなおそれに〈命令法〉の意味がさらに加わる。つまりイエスにおいて現れてきている神の憐みは、また人間をもあわれみ深い者となさるからである<sup>⑧</sup>。

## 38

<sup>⑧</sup> バルト、前掲書、77ページを参照されたい。「イエスが、罪人と交わるという汚れを帯びた交わりを厭われなかったということは、神ご自身が慈しみあり、憐れみ深かったからである。そして、それ故に、われわれの憐れみであられるのである」。ヘルトが前掲書でより強く強調するのは、直接法の文体である。この文章は、こう理解されるべきものである。イエスが敵対者に求めておられるのは、「ご自分の、彼らが非

それ故に、説教の課題は、ただ単にイエスを自由な恵みのゆえに力に満ちたみ言葉をもって圧倒的に召し出しておられる方として、しかもその恵みの自由においてきわめてラディカルな憐れみのみこころをもって徴税人と罪人との食卓の交わりに生きておられる方として宣べ伝えるに留  
5 まらないのである。イエスが神を失っている者をこのように力に満ちて召し出しておられるみ言葉は、今日においても、われわれに主に従うように呼びかけ、また自由のうちに置き定めてくださるのである。このことは、もちろんいかなるものによっても凌駕されることはない。輪郭のはっきりしない行動プログラムが時に言うてのけたりするようなことはないのである。まさしくわれわれのペリコーペのふたつの部分を包み込んで語られているということは、何よりも幻想を抱  
10 かないようにという戒めとなる。ただ単に連帯を呼びかけ、また行動することによって救いを引き寄せることができるなどという幻想に陥らないようにしてくれるのである。

ただ単に現代的な〈進歩的な〉神学者だけではなくて、改革を志している保守的な神学者たちもまた説明するのは、もちろん、食卓を共にするということが「多くの言葉を語るより印象  
15 深いし」、「感銘を与えるものである」と言っている（たとえばイエレミアスである<sup>④</sup>。イエレミアスは賛意を表しながら、ホーフイウスの18ページ以下の文章を引用している。それによれば、共に食卓をすることの方が「誤解されない説教」となるのであると、自分で言葉を言い足している  
のである。まるで、イエスがこの食事を共にされることによって「大食らいで大酒のみ」（マタイによる福音書第11章19節）であるとの誤解を招くことがなかったかのように語られる。しかし、み言葉よりも行為の方が、よりはっきりしているし、誤解がないなどというようなものではない。  
20 イエスにおいては、もちろんこのふたつのことが、ひとつの響きを立てているのである。イエスは憐れみと連帯を説教をなさったし、また実践なさったのである。主イエスは自由をもたせられると共にそれを実際に生きられたのである。イエスが、ただこの世界を解釈しておられるという  
ようなことでないことはもちろんであり、更に世界を変革なさったのである。しかし、それはまさしくみ言葉によってであり、そのみ言葉に対応する行為によってであったのである。社会革命を  
25 実行したり、プログラムを立てたりするようなことではなかった。そのようなことでは、人間の内部を聖めるということはないままに終わったであろう。

このみ言葉は、今日、実にしばしば「多くの言葉」、信心深い言葉を連ねて信仰を養うつもりだけのおしゃべり、ほんとうは何も意味あることを語ってはいない無駄なおしゃべりによって、片隅に押しやられてしまっており、単なる〈響きと煙〉〔ゲーテ〕に過ぎないものとされてしまっ  
30 ている。その時、明らかにわれわれが忘れてるのは、神が無きものを有るものとしてお呼びになったのは、そのみ言葉によるよりほかはなく、神を失っていた者を義とされた者も、み言葉によってなさっているということである（ローマの信徒への手紙第4章5節、17節）。われわれは、み言葉が力ある働き（efficacia）をするという約束（イザヤ書第55章11節、エレミヤ書第23章29

### 33

難する行為でしておられるわざは、ホセア書第6章6節が語り出している神のご意思に対応するものであることをきちんと捉えるようにということである。ここにあるのは、倫理的態度を示すひとつの戒めというようなものではない。もちろん、それも共に語られているであろうが。……」。もっとも、いずれにせよ、そこで確保すべきは、愛の戒めによってこそ、律法は解釈されるべきだということが持つ大切な意味である。参照してほしいのは、ボルンカムの前掲書、24ページと、雑誌「福音主義神学」増刊、第33号R.フンメル「教会とユダヤ教の対決」（R. Hummel, Die Auseinandersetzung zwischen Kirche u. Judentum, BzEvTh 33）、1963年、38ページ以下、97ページ以下である。

<sup>④</sup> 『世界を完成される方としてのイエス』（Jesus als Weltvollender）、1930年、77ページ、乃至は『イエスの譬え』（Die Gleinisse Jesu）、第6版、1962年、225ページ。

節その他) に対して、だんだん疑い深くなってきており、むしろ、神は革命的な変革や社会的な発展の中で働いておられる、と見るようになってしまっている。その結果、人間が、しばしば政治的な人間、あるいは社会学的な人間としてのみ登場して来ているようになったのであり、そのような人間にとっては、社会の構造や制度の変革が救いをもたらすと約束されているように思い込んでいるのである。ミッチャリヒの『悲しみの不能』についての書物が、初めてというわけではないが、この社会学的政治学的な短絡を、現実が見えていない行為であると明らかにしてくれているはずである(もっとも心理学的教育学的な救済論というのは人間に救いをもたらすことはないことは確かである)。み言葉による自由解放がなく、神によって受け入れられるということがないところにおいては、いかなる救いもない。今日の世界においても、今日の世界と違った構造を持ち、それだけ抑圧が少ないと思われる世界においても同じことである。もう過ぎ去ってしまったようなタブーに対して抵抗を示そうが、われわれの教会や神学の営みに混乱をもたらし、それが、いささかでも救いをもたらすのだと言い張っても、さまざまな象徴的な示威行動が意味を持つとすれば、それが、ただここで語られる食卓の交わりと同じような目に見える言葉(verbum visibile)となり、和解をもたらす〈召し出し〉の形を取り、憐れみの表現となっている時のみである。それこそが、〈学ぶこと〉を可能とするのである。

共に生き人間性を高めようという思いを現実化しようとするすべての形は、神の憐れみを反映し、再現するものである時にのみ、そしてその憐れみの基礎を作ってくださいるキリストに現れている「神の人間に対する愛」(テトスへの手紙第3章4節)に関わる時にのみ、意味を持つのである。疲れ、重荷を負っている者と連帯して兄弟の交わりを作るということは、神ご自身がキリストにおいてわれわれと連帯し、われわれの兄弟となってくださいるが故に切実なものとなり、また可能となるのである。「至高の方ご自身が、ひとりの人間として来てくださり、人間たちと共に食べたり飲んだりしてくださっている」<sup>⑮</sup>が故に、切実なものとなり、可能なものとなるのである。イエスが罪人たちと食卓を共にしてくださるという形において現れた神の憐れみが出来事となるのは、また、主が、罪人に、見える言葉としての聖餐において、パンを裂き、杯を差し出してくださる時である。そのことによって罪人を、ご自身との交わりを中に引き入れ、終末の時の喜びの食卓の前祝いの味わいを保証してくださるのである。そうは言っても、イエスが食卓の交わりをしてくださるということは、決してただ sacrament だけに限定されるべきものではないであろう。

ホセア書の引用が二重の方向を指し示している。これに対応して説教の第二部は、まさに全体の状況から始めて、すイエスの解放と勇気を与える自由とは、ご自身に属する者たちそのものをキリスト者の自由の中に置いてくださるといことであるということにすべての重点を移して行くことになる。イエスが自由に人間と共に生きようと呼びかけておられるということは、今日においては、宗教的・社会的に区別され差別されている者の傍らに立つようと命じておられるということなのである。それは教会が他者の傍らに立ち、他者のために存在することもしないで、自分自身のことだけにかかずらうことを禁止しておられるということである。それは、教会に対して、他者に兄弟として出会うことをせず、他者を裁き、他者を訴える者の役割を演じてしまうことを禁じられる。説教が、いかなる疑念をも抱かせてはならないことは、ここではただ単に人間の内部、心の世界に留まり、あるいは信仰に専心するグループを作ることだけに終わるのではなくて、キリスト者が、ご自身の主から呼びかけられているということについてである。イデオロギーに執着し、社会的・世界観的な偏見を抱き続け、何よりも自己義認に閉ざされてしまよ

うなグループを、勇気をもって破壊するようにしようということである。

既に、マタイが、このペリコーペを、当時の教会の具体的な状況の中に置いている。教会は「(ユダヤ人キリスト者)の教会と異邦人キリスト者とが共に交わりを作っていることを視野に入れている」からである<sup>16</sup>。そこでわれわれが留意すべきことは、新約聖書の時代における食卓の交わりを、今日の聖餐礼拝と取り違えられてはならないということである。確かに今日も、われわれのテキストに基づいて教派的なことにこだわる実践家たちや、共に聖餐に与ることを拒否することに対して反論する根拠が十分に与えられている。とは言うものの、神学的な専門家たちだけに委ねられている伝統的な聖餐論の違いなどというものは、実際には、既に、教会員にとってはほとんど理解されないままのことになっている。南アフリカやアメリカの国におけるさまざまな関係は、民族的な社会的な差別を、教会が共に交わることを拒否することと一緒にしてしまいかねないのであって、教会員があまりにも簡単に自分だけを、救いが確かな者にするようにしてしまうようなことが起こらないようにすべきである。

それ故に、より大事なことは、教会員に勇気を与えることである。「病める者の医師」に生かされながら、自分自身が教会の壁を乗り越えて、病める者に「医師として」仕えるように勇気を与えることである。これは、まさに場合によっては文字通りあてはまることである。「さまざまな紛争諸問題、もちろん、言うまでもなく〈罪〉から生まれるたくさんの病が(今もあり、あるいはこれからも生ずるかもしれない病が)、ほんの一時間でもよいから憐れみをもって耳を傾けてもらいたいと待っている——おそらくもちろんそれ以上耳を傾けてくれることを待っている」(レスラー、242ページ)。これはただ、ここで求められる共に生き、連帯することのひとつの例に過ぎない。これが、スキャンダラスなこと、一般受けしないことなどと感じ取られることはないであろう。イエスが生きてくださった意味における連帯というのは、しかしまた、差別されている者との連帯であったのである。そして、それが意味することは、われわれが信仰者と信仰者とを明確に分けることに陥りやすく、宗教的・道徳的・政治的・社会的に自分とは異なる者たちに対して疑惑を抱き、異質感をもって対応し、情熱的に自分自身を正当化してしまうことになりかねないということである。砦のように堅くなっている集団に穴を開け、そのような生き方に疑問を抱かせること、それは〈純粹さを損なうこと〉、自分の面目を失うこと、よくない噂を立てられ、不信感を招くという危険を犯すことになる。もちろん、主は人間に声をかけられ、共に生きるように引きずり込んでくださっている。そこではそのような不安が消えるはずである。非難めいた判断を蒙ることに対抗し、差別され犠牲となっている人の仲間になるように、としてくださっているのである。

### III. ハインツ・ヨアヒム・ヘルト

(Heinz Joachim Held, hören und fragen, Band 3, 2. Teil, 1973, 39-46)

われわれに与えられている説教テキストは、終わりから読んでこそ、理解し得るであろう。様

38

<sup>16</sup> フンメル、前掲書、39ページ。これはローマイヤーに対する反論である。ローマイヤーは、ホセア書第6章6節を神殿における祭儀と対抗して、教会が聖餐礼拝をするように指示している言葉だとみただである。



式史研究がもたらした洞察に従っても、その重い内容的からしても、イエスが、ご自分の特別なメシアとしての使命について、ご自身で語られた言葉（13節後半）であり、このパラグラフの頂点をなしているのである。この説教テキストの中に含まれているのは、ふたつの伝承である、もともとはそれぞれ独立していたであろう。ひとつは、ある徴税人を（マルコやルカに従えば）弟子として、あるいは、（マタイによる福音書第10章3節によれば、〈あの徴税人〉マタイと言うが）使徒として召し出されたという報告である（9節）。そして、もうひとつには、イエスが——またその弟子たちが（！）——教会的にも、宗教的にも、政治的にも、社会的にも、自分が属する民から遠ざけられていた者と食卓を共にされたということが語られており（10-13節）、それが、新しい統一を見出しながら、ひとつにされているのである。共観福音書を読み比べてみると、ルカはこのふたつの出来事の時間と場所と、そのいずれにおいても結びついていることを完全に明らかにしている。主イエスに従うように召し出された徴税人が、自分の家で主イエスのために大きな歓迎会を催したというのである、ということをおもひにしているのである（ルカによる福音書第5章29節）。他の福音書記者たちは、少なくともこういう解釈である。ここで語られているのは、カファルナウムにおけるイエスご自身の家において食事がなされたらしい。われわれのペリコーペについて伝承史的な考察をすると、それなりの仕方で確かなこととしてくれているのは、ここにあるテキストが、宣教としてどのような内容をもっているかということは、キリスト論的な基本的な説き明かしをすえれば、光が当たって見えてくるということである。それがこの結論の言葉となっているのである。

## 20 1. イエスのメシアとしての使命に参加するようという呼びかけ

（13節で）神から遣わされたキリストとしてのご自身の召命の義務について、イエスが結論として語っておられることに対応しているのが、最初に語られている主イエスの行動である（9節）。イエスは〈罪人〉のひとりをおよびを〈呼んでおられる〉。それはルカが補って説明しているように（ルカによる福音書第5章32節）、「悔い改め」へと招かれたことなのである。マタイにおいては、疑いもなく、それに弟子に加わるようにと召しておられるということが、特別な意味を持つものとして語られている。つまり、使徒の職務に就かせておられるのである。すべての正しい者たちから侮蔑の眼差しをもって扱われてきた徴税人が、イエスご自身の神から遣わされた使命に参加するようにと招かれているのである。この男は二重の意味においてイエスの〈あとに従う者〉とならなければならないのであったのである。この男は学び教え行動しながらイエスのキリストとしての歩みに従って行くと共に、自分自身の課題、〈先立ち行く者〉としてのキリストから与えられた使命を受け取るのである。つまり、イエスから与えられた使命を自ら受け入れ、更に、それを実行するのである。それは、自分から遠ざかってしまい、自分から分離してしまっている人びとに対して、神の交わりを、愛を、憐れみを開示し、それにあずかることができるようにするということである。

13節におけるようにカレイン（呼ぶ・招く）という言葉は、孤立して用いることは、弟子の召命（マタイによる福音書第4章21節、マルコによる福音書第1章20節）などにおいても、その適用を見出すことができる。これは注目に値する。これは、いわば特別な意味において、つまり人間を獲る漁師となるという使命をお与えになるという意味で、ご自分に従って来るようとお招きになったイエスの招きの声を短縮した形で言い表しているものである。一般的に言うならば、このふたつの物語の中で、形式的な、また用語の上での、並行関係があることを無視することはできない。

そこで明らかになることは、マタイが、イエスご自身のご生涯から生まれ、伝承されてきた、物語

と主の言葉、という資料を、順序を整えて、語ろうとしていることである。イエスが、第4章17節が語るような、ご自身の働きを最初から弟子たちをお召しになっていること（第4章18-22節）。この弟子たちにご自身の働きに参与させておられること（第9章35節—第10章8節以下）である。このことは、福音書記者が、まず総括的に描き出していることである（第4章23-25節、第9章35節）。そして、それから個々の実例を挙げている（第5章から第7章までに教えが記される）。第8章—第9章34節までに行動が語られる。そのように体系的に叙述してきているのである。イエスの宣教の言葉と、〈従う者たち〉に委ねられた説教（第4章17節、第10章7節）の内容とが、同じ響きを立てていること、そしてまた、イエスの救いの働きとその弟子たちの救いの働きの両者が（第4章23節、第9章35節、第10章1節）、同じ響きを持っているということは、このような主に従うということが、  
5  
10  
15  
いったいどういうことであるか、についての考え方を強調して見せているのである（第11章2節が語るような）「キリストのなさったこと」は、これに先立つ章との関連で言うならば、イエスご自身のみ言葉と行為におけるお働きを意味すると共に、イエスの使者たちの説教と行動を通じてのイエスのお働きをも意味していたのである。なぜかと言うならば、ラビの法的な原則が語っているように「ひとりの人間から遣わされた使者は、その人そのものだからである」（K・L・シュミット、新約聖書神学辞典、第1巻、415 ページ参照）。

そこでわれわれのペリコーペにおいては、イエスの弟子たちが、事実として「徴税人と罪人たち」の食卓仲間として、イエスの傍らにあつてこれに参与したのである。マタイが明瞭に特記していることは、徴税人と罪人たちが「やって来た」のは、イエスとその弟子たちと共にあるためであった。従って、われわれがよく理解すべきことは、イエスの呼びかけと招き（ギリシア語では、このふたつのことを同時に意味していたのである）が、積極的に応えられているということである。イエスが、道徳的に、宗教的に、政治的にさえも、あらゆる正しいユダヤ人にとっては、疑わしいものであり、問題の多いものであり、嫌悪をすべきものであった人間と共に交わりをなさるということは、まさしく13節後半に描かれているような、イエスがキリストとして使命を  
20  
25  
30  
委ねられているということから、直接生まれて来ることとして捉えられるべきものだという事である（徴税人というのは結局のところ異国の権力にへつらう者であり、裏切り者であり、利益ばかりを求めており、神の民に反することにのみ関心を抱いて生きていたのである！）。語られているのは、実際に生きておられたし、実践しておられたキリスト論である。イエスが罪人となつてしまった者たちに神から遣わされた者であるということは、（9節が述べるように）呼び招く行為においても実行されたし、また「罪人たち」を、完全に全くご自身の交わりの中に受け入れるということにおいても実践されたのである。

共同の食事ということが、一般的に言ってもそうであるが、特にオリエントにおいては、特別な交わりと連帯を確かにし、実現をするということのしるしであったことは、特別に証明する必要はないであろう。しかし、古代において、そのようなことが持っていた宗教的な意味を指摘するということ  
35  
は、もちろん余計なことではないであろう。「共同の食事というものは密接な交わりを作り出すものであった。それは食卓の祝福の行為によって生み出されるものなのである。この祝福に、食卓に座るすべての者があずかるのであり、それによって同じ祝福に生きる交わりとして結び合わされるのである（W・グルントマン、『マルコによる福音書』1959年、61 ページ）。しかしながら、更に、そのことを越えて、ユダヤの伝承においても、新約聖書の伝承においても、来たりつつある世におけることとして約束され、慕いこがれつつ待たれている、神が人間と交わってくださるということこそ、盛大な祭りの食卓、喜びの食卓として理解されていたのである。神は、それをご自身の者のために備えて  
40  
くださる。ここでもまた、これを更にひとつひとつ証明してみせる必要はないのである。

われわれの関連で、もちろんたいへん興味のある観察がなされるのは、まさに（第8章11-12節が述べるように）マタイにおいては、「神の国の子たち」と呼ばれている）従来の神の民に属している者たちに対する警告と批判という仕方、「多くの」遠ざかっている者、異質な人間とされている者について、イエスが、お語りになっているということである。これらの遠い人びとこそ、あの約束された神の世界における祝宴に「やって来る」であろう。そして、まさしく今、「多くの」徴税人と罪人たちが「やって来る」のである。イエスの食卓にあずかるためである。これこそ、新しい世界における神との盛大なる食卓の交わりにあずかる約束だったのである。その保証となり、メシアによって、罪の赦しといのちと祝福とが与えられることが約束されるということなのである。

5

## 10 2. イエスとその弟子たちによって実践に移されたキリスト論に対するプロテスト

このようにイエスによって実践に移されたキリスト論に対して、ファリサイ派の者たちのプロテストの声が挙がった（11節）。ファリサイ派とは、神の教会を形成するグループであり、真剣に神の意志を日常の生活の中で実行しようとするものであった。つまり〈義〉の実現こそが、来た

15 りつつある神の社会に備える道だ、と主張していたのである。マタイによる福音書においては、ここで初めてファリサイ派の人たちが、イエスと、イエスご自身が主張するメシアとして派遣されたと言われる使命とに対立して登場するに至るのである。既に、この最初の機会において示されているのは、キリスト・イエスと、当時の意識的に信心深く、神を畏れる者との間にあった関係が、深い対立と鋭い論争によって規定されているということである。既に、山上の説教においてイエスがなされたことは、ファリサイ派の人たちの〈義〉が、イエスによって示された神の律法を真実に成就する道と比べると、まことに欠けが多いことということである。われわれは、この

20 ような仕方によって、イエスが遣わされて来られたということが意味する〈信心批判〉の次元を洞察することができるようになるであろう。イエスは、新約聖書において、特にマタイによる福音書において、ファリサイ派の人びとに対して対抗する位置を取っておられるのであり、それは

25 もちろん、イエスの教会にとっても、また絶えざる危険・試練として、その途上においてつきま

15

20

25

「ファリサイ派の人びと（すなわち分離派の人びと）は、一種の敬虔派的な信徒運動である。人生の営みを厳しくしようとした。内的にも外的にも、悔い改めの態度を取り続けた……ファリサイ派の人びとにとって大切であったのは、全体である。神の審きと赦しである。聖なる民となることである」（J. シュニーヴィント『マタイによる福音書』1950年、22ページ、119ページ）。

30

「イエスは義なる人びとに対して認めておられていたのであるが、これらの人びとは真実に神に従ったし、神がお命じになったことを実行したのである。聖書に従って行動したし、それ故に、道から外れた者たちの傍らにあつて丈夫な者として生きたのである。それは羊飼いの傍らに愛されて生きた羊の群れのようなものであつて、過ちを犯した群れとは異なるのである……それ故に、この正しさにいつもつきまとうのは、ひとつの試練である。それは、われわれ自身の中に強固な自己感情を呼び起こすからである……イエスが正しい人びとに言われたのは、彼らの善行がそもそも偽りであったというようなことではない。むしろ善行を通じて、彼ら特有の傲慢に陥ったのである。自分は、神が命じられたことを、実際にやってのけているのだと思い込む傲慢である。善行をなすことによって、自分自身に罪を備えてしまった。自分の義を通じて墮落を備えてしまった。自分自身では、もはや神の前に身を屈めることをしなくなったからである。……

35

40

彼らを信心深い思いにひきずり込んでしまった、この傲慢な思いから生まれる努力が、人びととの付き合いにおいても厳しい態度を取らせるようになった。傲慢が愛を窒息させているのである。信心

深い男は、その高みに立って不信心な者たちの戦を必要としないどころか、むしろ、自分自身の聖さを、罪人を下に見ることによって保証したのである。……そのようなわけで、信仰から反対のものが生じた。不信心なる信心という間違った姿が現れた。人間は、これによって自己を栄光化した。神に栄光を帰したのではない。人間を滅ぼした。しかし、人間に助けを与えることはなかった」(A. シュラッター『キリストの物語』1921年、190ページ以下)。

5

「真剣にキリスト者である」ことを欲する人びとが、かえって、イエスとそこご使命とに反乱することを当然のこととしてしまうことになっている。いわゆる〈世界〉ではなくて、教会の仕事を、確信をもってしている人びとが、神と神のご意志、そして神が遣わされたキリストとを理解せず、むしろ神を問い糾してしまうことが起こる。その際、少なくとも、イエスによって、メシアとしての使命が、このような形で果たされたことが正しかったかということにファリサイ派の人びとが問うているこの箇所において、論争的に強調して論じるような、不必要なことをすることはしないであろう。イエスが派遣され、みわざを行っておられることをめぐって、途方もない論争が、もっと後になって、たとえば、第11章や第12章において、語られるに至る。しかしながら、ここにおいては、イエスが、み言葉とみわざとにおいて、キリストとしての働きを展開しておられるという枠のなかで、このように異様に思えるキリスト論的な行動の正しさを問う問いが十分に分かりやすい意味を獲得するのである。イエスのみ言葉とみわざとは、従来の考え方や期待からすると全く聴いたこともなく、ひとの心を驚かせるようなものであったのである。そこで、この問いが得るのは、また何にも囚われない、いやまさしく人の心を惹きつける答えである。「角も生えていなければ、牙もむいてない」答えである。その答えにおいては、「明瞭な理性的根拠」(12節)と並んで、(13節前半にあるような)「聖書の証言」が語られるのである。ルターが1521年、ヴォルムスの国会の前において、これを言い換えた言葉を語って見せているのである。

10

15

20

### 25 3. 憐れみというメシアの使命

イエスが、ご自身がメシアとして行動される、その権利を問われたとき、お答えになられたのは、たいへんはっきりしたものであり、その意味を十分に明らかにしているものであり、否定することができないものであった。後にご自身の使命にあらがう相手と対決をなさった時のように、(第22章21節にあるような)謎をかけるものでもなく、(第22章20節にあるような)相手を戒めるようなものでもなく、(第21章25節や第22章45節にあるような)反問するというようなものでもなかったのである。つまり、イエスが神から遣わされたメシアとしてのご自分の使命についてお語りになったこの言葉が、積極的な、さらには規範的なものとさえ言える特質を持つものとして語られたことについては、どんなに高く評価してもしすぎることはないのである。イエスは、医師(〈救い主〉)としてご自身を示しておられる。この医師は、その務めのゆえに病んでいる者のところに赴かざるを得ないし、あるいは自分のところに来る病人を断わることも許されない。そうでなかったならば、自分がその責任を負わなければならないことになる。そこで洞察力のある人には誰に対しても明らかになることであるが、イエスのメシアとしての行動は、罪責ある人間の病的状況を正当化するものでもなく、それを確かめるようなことでもない。それとは遥かに遠いことである。むしろそれは現実には癒しを与えることであり、完全に新しい人間、丈夫な人間として、そのいのちを救い、目標に至らせるものなのである。

30

35

40

その際、われわれに与えられている説教テキストの前に語られている物語が明らかにしてくれてい

るのは〈内的な〉癒しは、〈外的に〉健康になるということと切り離すことはできないということである（第9章2-8節）。この説教のテキストに続くペリコーペが語るのは、イエスがもたらしてくださったし、主導権を取ってくださる〈救い〉を表わすイメージである。それは、婚宴を語るものである。包括的ないのちの喜びに満ち、祭りの思いに満たされた、何の欠けもない婚宴を語るものである。

5 イエスのメシアとしてのご使命のなかに、人間の生活の肉体的な次元も語られているということは、マタイにおけるイエスのお働きの総括的な叙述が示す通りである（第4章23節、第9章35節）。それはまた、福音書記者によってまとめて円環を描くように語られている救い主のみわざも示すところである（第8章2節-第9章34節）。イエスのお働きは、新しい世界、救われた世界における、新しい人間、丈夫な人間を目指すものなのである。

10 イエスは、これに加えて、神のご意志が憐れみにあるという神の基本的な原則が明らかにされるために、ホセア書の引用をしておられる。それはイエスによって遂行されたメシアとしての行動が、またはっきりと神によってよしとされていることをも示すのである。これは憐れみとは何であるかということ解釈してみせ、実践してみせておられるのである。これが、人間を助け、  
15 共同体に誠実であり、それどころか、共同体を発見し、基礎づけ、連帯を生む行為の基本的な神の戒めに対応するのである。それは、ただ単に、ご自身の民における神の行動を規定するものとしてあるだけではない。これが神の民の共同生活をも規定すべきなのである。そこでイエスのご使命とわれわれがその使命にあずかるということが、神によって命じられており、それどころか、それは、神に倣って生きるべき憐れみを知覚すること以外の何ものでもないのである。

20 この神の憐れみの本質に光が当てられ、その意味が明らかにされるのは、ここで助けを与え、癒しを与える医師の行動によってである。医師は愛のすべてを注ぎ、自分のすべての技術を傾けて、自分に委ねられた病人に身を向ける。この病人が苦しむのは、その人自身の罪責によるのか、それとも罪責なしに苦しみを担ってしまったのかというようなことは、あえて問題にしない。この癒しの行為は、罪責の赦しを基本的なモチーフとしている。いや、それどころか、むしろ  
25 前提としている。病人の完全な健康の回復のための努力をする時、医師は「悪を計算に入れておくこと」などは不可能である。つまり患者が罪責ある態度であったり、偽りの生き方をしているということが、集中的にみとってあげることをいささかでも加減するようなことはないのである。パウロが、コリントの信徒への手紙I第13章4-7節において愛について語っていることは、そのままこの憐れみ深い行動にあてはまることと言えよう。

30 憐れみの概念が共観福音書の中に現れてくる時、それは何よりも（たとえばマタイによる福音書第9章27節、第15章22節、第17章15節、第20章30-31節、そしてそれに対応する並行記事ルカによる福音書第16章24節、第17章13節にあるように）められてか、（たとえばマタイによる福音書第18章33節、ルカによる福音書第10章37節にあるように）証しのためであるか、あるいは（マタイによる福音書第18章33節にあるような）求められてする見込みのない危機の状況における助け  
35 なのである。

預言者ホセアからの聖書の引用は、ひとつの呼びかけと結びついている。「行って学べ！」と言われるのである。ここに語られていることは、何よりも、神から遣わされたメシアであるとイエスを認めるようにという要求である。それは、イエスの敵対者によって疑問視されている神の行動を明らかにする憐れみへの意志に対応するものである。だがしかしそこで、誤認してはならないことは、ここで語られているのは、ご自身を批判する者たちへのイエスの魂への配慮の思いのこもった計画であるということである。ここで明らかに証しされる神のご意志に対して、人間



の側でも、自ら進んで、自分と共に生きるすべての人間と交わるということが語られているのである。明らかに罪責を負っている者、公に侮蔑されている者、社会的・政治的・宗教的に軽蔑されている者も認めるということである。イエスが、約束された憐れみのキリストでおられ、イエスが遣わされたことは憐れみの使命を果たすためであるとするならば、同じように疑うべくもなく明らかになるのは、イエスに従うようにという招きは、イエスの憐れみを学ぶ学校に入り、その道を歩むということなのである。キリスト者、すなわち、キリストに従う者であろうとするキリスト者は、憐れみ深い者となるのである。ここに、ご自身のメシア性が滅り立つ、つまりメシア・イエスが意味する〈キリストらしいこと〉が滅り立つ。このキリストこそが新約聖書において、われわれに対して証言されている方なのである。

5  
10  
15  
20  
25  
30  
35  
40

こういうわけで、イエスの呼びかけ、そしてまた人びと交わられたことが、敵であろうが、批判者であろうが、友人であろうが、誰に対しても、呼びかけておられるのは、われわれが憐れみ深くなるようにと願っておられたからである。イエスの、われわれに対する宣教も、その行動も、われわれが恐るべき非人間的なものとなってしまうこと、つまり、憐れみを失うという動機から解放されるということをお願いしたことであつた。憐れみを失ってしまうこと、それこそ、われわれの自己義認の結果であり、その兄弟のようなものでしかないのである。まさしく人間の共に生きる生活をするにより、神の支配を決定的に実行するものとなり、神の義しさを貫く弁護者となるということこそ、この自己義認の憐れみを失った状況に対して、直ちに責任を負う者となることなのである。新しい、癒されて生きる人間は、このひそかなる病から癒された人間なのであつて、キリストを通じて憐れみ深い者となっているのである。ただこのようにしてこそ、キリストに似た新しい人間は、自己を規定するようになる。キリストにおける神の似姿に倣い、新しくされるのであり、完全な人間性を得るに至るのである。

マタイによる福音書の山上の説教にせよ、ルカによる福音書の野における説教にせよ、それらは、この憐れみに生きるようになった新しい人間の本質について語られたイエスの言葉を集めたものなのである（たとえばマタイによる福音書第5章3-10節、38-48節、第7章1-5節、ルカによる福音書第6章27-38節）。この人間の義は、律法学者・ファリサイ派に勝るものである。このひとにとっては、自己義認は、イエスと出会うことによって、自分自身の至らなさを知り、赦しが必要であることを知ることによって過、ぎ去ってしまっているのである。

このキリスト者の、憐れみに生きることを説き明かすのは、パウロにおいては、包括的にコロサイの信徒への手紙第3章10-17節において語られている。

しかしまた、共観福音書の叙述によれば、イエスのお働きは、神が欲しておられわれわれ人間のためにお考えになってくださった憐れみの具体的な展開以外の何ものでもないのである（マタイによる福音書第14章14節、第15章32節、第20章34節が語るような）イエスの助け、またはその救いは、（マルコによる福音書第6章34節が語るような）イエスの教えと共に、イエスのいのち、そのものなのであり、さらに加えて、イエスの使徒、イエスに従う者たちを派遣なさるということもまた（マタイによる福音書第9章36節以下）イエスの慈しみに根ざすものなのである。その限りにおいてホセア書第6章6節からの引用は——しかもまた、マタイによる福音書第12章7節に、もう一度これが現れてくるのであるが——事実としてわれわれのペリコーペとの関連を越え出て、キリスト論的な、またキリスト者であることの中にある〈キリスト的なもの〉を規定するためにも、その道を示す意味を持つのである。

#### 4. 今日における憐れみ

「この物語を理解するということは、福音そのものを理解するということである」。ヘルムート・ゴルヴィッツアーは、われわれに与えられているテキストについて、そのように書いている（ゲッティンゲン説教黙想集第6巻、1951-52年、155ページ）。この物語を説教するということは、そういうことになれば、福音を説教するということの意味することになる。神の力に溢れる憐れみの喜ばしい解放のメッセージを語ることである。それは第1に、イエス・キリストによって、この世界にあって神から別れてしまい、疎外関係にあった者たちに対する道を拓くものであり、第2に、法的に、正しい人間にとっては、無理解、憂慮、いや、抵抗すら呼び起こすものであり、第3に、イエスにお従いするということは、当然のこととして、憐れみのこの使命を果たしながら、イエスに学ぶ者となり、イエスと共に働く者となるということなのである。このようにして、ここで論じられるテキストについて説教をするための基本的な考えが与えられる。その際、われわれの時代においてキリストに委ねられた憐れみの主題を論ずるとき、以下のことが考慮されなければならないであろう。

憐れみは、われわれの世界において定着してしまっている境界線、分離線、しかもイエスの教会の中にさえあるこれらのものを乗り越えようとする、疲れを知らない努力である。人間がいるところ人間はお互いに区別したが。正しい者と正しくない者、よい者と悪い者、豊かな者と貧しい者、教養ある者と教養のない者、信仰のある者と信仰のない者、文化人と野蛮な人びと——これらは、人間社会において現実に起こり、あるいは想像上のことに留まるかもしれないが、お互いを区別し合ういくつかの例に過ぎない。聖書が語る憐れみの概念は、行動を意味する——神の行動であろうが、人間の行動であろうが、同じである。この行動が、今ある交わりをさらに強化する。実践し、交わりがこわれているならば、それを再建する。砦に立てこもり、自分の位置を確保しようとするところから飛び出すのである。われわれは、そのように頑なになることによって、神の要求や、共に生きる人間よりも、自分の利己的な要求を守ろうとする。自分と考えが違ふ者、違った行動をする者、違った生き方をする者、違った信仰に生きる者を、自分自身の思想や生活や行動の中に受け入れる。境界線も溝も壁も乗り越えるのである。

もちろん、憐れみに生きるということは、われわれのただなかにある悪を保証したり、正当化したりするようなことは意味しない。この世に支配的な不正を確かなものにしたり、正当化するものではない。むしろ憐れみが自分を示すのは、不正なるものを、辛口な言葉や、憎しみや、自己義認を含まずに、はっきり名指して呼ぶことができるようになるということである。辛辣な批判を不正な人びとに浴びせかけることではない。そうではなくて赦すのである。交わりを断つことではない。医師が愛と忍耐とをもって自分の技術のすべてを尽くして病が癒されることを求めるのと同じである。マルティーン・ルターは、1538年のことであるが、マタイによる福音書に付した「注」において、われわれのテキストについて、こう語っている。罪を犯している、共に生きている人間を、正しい者にしてあげることが、憐れみの義務を果たすのに不可欠のことである。「隣人が悲惨と困窮の中にある時に、その人によくしてあげることが憐れみである……しかし、隣人の困窮や悲惨とは、そのひとの罪である。それ故に、この隣人が教えを受け、罪を思い起こさせられ、罪を咎められ、担ってもらい、慰められるということが必要なのである」（ヴァルクセン版ルター全集第7巻、セントルイス、1891年、56-57行）。

つまり、憐れみは、正しさや義と対立するものとさせられることはあり得ないのである。共に交わるところでの正しく連帯する行動である限り、憐れみは、神ないしは人間の義を確かにし、義に向かうようにと人を助けるわざと関わりを持つのである（エレミヤ書第9章23節、ホセア書第12章7節、ゼカリア書第7章9-10節参照）。憐れみというのは物質的にも、道徳的にも、宗教的にも低く見られ、陰に置かれてしまっている人に対して、慈しみ深く、理解を持ち、これを助け、赦しを与える姿勢を示すのである（創世記第40章14節、ヨシュア記第2章12-14節、サ

- ムエル記下第9章1節以下。更に、またマタイによる福音書第5章44節以下、ルカによる福音書第6章35-36節を参照されたい)。われわれが生きている、今日の世界全体が作る社会において、技術的にも、産業の上でも、貿易の上でも、教育水準という点でも、われわれより低い水準の諸民族を考えないわけにはいかない。憐みという言葉で描き出されているのは、人間をその神との疎外関係にあるところから（義認を通じて）、〈神の子として〉の神との完全な交わりへと導くことである。そして共に生きる人間との間にある疎外関係からも（聖化を通じて）自分の仲間の人間との完全な交わりを作るように導くのである。新しい人間性を得て〈兄弟〉として生きるようにするのである。